全国語学教育学会　日本語教育研究部会
JALT Japanese as a Second Language Special Interest Group

JALT JSL SIG NEWSLETTER

Issue #18 (1) [serial 42] Spring 2021 (春-2 月号)

JSL SIG 会員の皆様

少し前まで、寒の戻りで寒さが厳しかったですが、日差しが暖かく感じる季節となりました。朝晩はまだまだ寒い日がありますが、少しずつ春になっていくようです。

Dear JSL SIG members,,
This is to inform you that I have stepped down as JSL coordinator, and Shingo Moriyama has taken over my place. Please give him your support!

早速ですがＪＳＬで昨年 11 月に行った役員選挙の結果、中京大学の森山真吾氏が 2021 年度のコーディネーターに決まりました。皆様、引き続きよろしくお願いします。
（JSL former coordinator 川手 Mierzejewska 恩 ）

Inthis issue

Geetings	**1**
SIG News	**2**
SIG Ofiers for 2021	**3**
Feature Article	**4-6**
JALT 2020 presentations	**7-11**
SIG Information	**12**

以下 2021 年度コーディネーターの森山真吾氏のお言葉を頂戴します。(以下原文のままです。)

JSL SIG 会員の皆様

長年に渡って JSL SIG を盛り上げてくださった川手先生には、これまでのご尽力に対して深く感謝いたします。We would like to express our appreciation for Kawate-Mierzejewska's valuable work, and continued support.

川手先生から引き継いで、2021 年度の調整役を務めることになりました森山真吾です。任期は 1 年です。所属メンバーのみなさん、よろしくお願いします

日本語教育に関わる学術学会が国内外に複数ある中で、この分科会に参加してくださっているみなさんの期待や意欲を大切にしたいと考えています。具体的には、所属していることの価値を、教育実践や研究の情報共有、年次大会や論文集での発表機会、メンバー間の交流促進の 3 点においてみなさんがさらに強く実感できるように運営したいと願っています。今期は JSL SIG の再価値づけと再定義に務める一年になると思います。

JSL SIG コーディネーター森山真吾

. . . . . .

※Please take a look at the following page for a summary of this issue.

This Issue:

This issue starts with SIG news business reports including Call for papers for JSL journal(vol. 15)as well as News Letter, and JSL new officers for 2021. You can next find JSL current officers for 2021 both in English and Japanese.

From Feature article, SHOJI, Shinichi introduces his project entitled "Interaction via COIL and Its Effects on Motivation to Study Japanese. 正路真一氏による『COIL による交流活動と日本語学習意欲の喚起』は、査読付きです。You can then find reviews of JALT 2020-JSLSIG related presentations including JSL forum 2020.

Finally, the last page shows SIG membership information.

We would like to express our appreciation to people who contributed their articles to this JSL Newsletter, and kindly supported our editorial team.
The JSL SIG Newsletter editorial team
Megumi Kawate-Mierzejewska,
Yo Takahashi, Shingo Moriyama

.....

SIG News/Business

▶Call For Papers: *JALT Journal of Japanese Language Education*, Volume 15

JJSL researchers, teachers and learners are all invited to contribute articles, research reports, essays, or book reviews.
Deadline for submissions: May 31, 2021
Pleasevisit<http://hosted.jalt.org/jsl/shuppan.htm> for Submission Guidelines
Please submit the manuscript to us at JSL SIG <jaltjsl@yahoo.co.jp>.
2021 年の秋に発行される予定の『JALT 日本語教育論集』の原稿を募集しております。興味のある方は、2021 年 5 月 31 日までに上記のメイルアドレスまで、原稿をお寄せください。尚ガイドラインは上記にある http にアクセスして下さい。原稿は編集ができるように MS ワードで送って下さい。

▶ Call for Articles: JALT JSL SIG Newsletter (JSL SIG NL)

You are all invited to contribute your research articles, teaching approaches, updated information, essays or book reviews in the area of Japanese language education to the next issue of JSL SIG. We accept articles related to JSL/JFL in either Japanese or English. For the next issue, submit your contribution by July 15, 2021, to naganomamo@yahoo.co.jp. Please email naganomamo@yahoo.co.jp for more information as well.
☛JSL では、ニュースレターへの寄稿も募集しております。締め切りは 7 月 15 日です。
原稿は、英語でも日本語でも受け付けております。日本語は、明朝体の 11F で、シングルスペースで A4 サイズで送って下さい。

（庭先の椿 February 2021）

JSLSIG New Officers For 2021

▸JSL NEW officers for 2021and changes

- Megumi Kawate-Mierzejewska stepped down as Coordinator , and Shingo Moriyama took over her place.
- Maki Hirono stepped down as Treasure, and Megumi Kawate-Mierzejewska replaced Maki Hirono as our new Treasurer. We would like to express our appreciation for Hirono's valuable work, and continued support.
- Keiko Sakatani stepped down as Publicity chair, and Yo Hamada took over Sakatani's position. We would like to express our appreciation for Sakatani's valuable work, and continued support.
- Frazer Smith stepped down as Membership chair, and Yoshiko Ichimura took over Smith's position. We would like to express our appreciation for Smith's valuable work, and continued support.

▸JSL current officers for 2021

Coordinator Shingo Moriyama
Treasurer Megumi Kawate-Mierzejewska
Program Chair Mayumi Shibakawa
Publication Chair Christopher Hennessy
Membership Chair ... Yoshiko Ichimura
NL English Editor... Peter Ross
NL chief Japanese Editor ...Megumi Kawate-Mierzejewska
Web Master Shingo Moriyama

JSL 会員皆様、以下 21 年度の役員一覧を日本語も交えてご紹介します。
昨年度 11 月の選挙結果をまとめてご報告します。引き続きよろしくお願いします。

JSL2021 年度役員

代表　森山真吾
会計担当　川手ミヤジェイエフスカ恩
企画担当 柴川真由美
出版担当クリストファー・ヘネシー
会員担当　市村佳子
英語 NL 担当　ピーター・ロス
日本語 NL 担当川手ミヤジェイエフスカ恩
ウエブ担当　森山真吾

役員の活動内容
役員は JSL 会員である必要があります。

代表の主な仕事は JSL 代表として EBM と呼ばれる JALT の役員会に出席し、会議の議題に賛成か反対の票を投じることです。役員会は年に 4 回あり、それぞれに土日と 2 日間参加します。ちなみに会議は、全て英語で行われます。
代表はその他、JSL の他の役員と協力し、本部の方針に従い JSL の活動をまとめていきます。

会計は、JALT 本部と緊密な連携を図り MAS 監査をサポートしてもらいます。

企画は、JALT 国際大会の JSL フォーラムや、Pan SIG 大会などにおける jsl の参加するフォーラムなどの企画の立案と実施に力を注ぎます。

出版とは、二年に 1 回出版される JSL ジャーナルのことで、担当者は集まった全ての原稿を査読に出し、査読をとおった原稿を手元に集めて、ジャーナルの形にまとめます。

会員担当とは、本部から毎月送られてくる会員リストを使い、会員期限のきれた会員に再加入を依頼します。

Web 担当は、JALTJSL Web の管理をします。必要に応じて情報を Up-date したり Up-load します。

Feature Article

COIL(Collaborative Online International Learning)による交流活動と日本語学習意欲の喚起

Interaction via COIL and Its Effects on Motivation to Study Japanese

正路真一
SHOJI, Shinichi
三重大学
Mie University

……

Summary in English

This is a report concerning a COIL project offered to international students at Mie University. In this project, the international students conducted poster presentations in Japanese to showcase the regional culture of Mie prefecture. They video-recorded their poster presentations in order to share them with students from another Japanese university. The audience-students, who were mostly native Japanese speakers, watched the presentations and provided feedback on the presentations. The post-project questionnaire given to the presenter students indicated that by receiving feedback from the audience-students and by watching other classmate students' presentations, most (but not all) of the presenter-students were motivated to further study Japanese language.

1. はじめに

2020 年前半のコロナ禍以降、大学等の教育機関では、Zoom や Microsoft Teams といったオンラインツールを用いた授業形態が急速に普及した。こうした遠隔型の教育活動の手法としては、かねてより Virtual Exchange (VE) や Collaborative Online International Learning (COIL) が特に語学学習や国際交流活動のフィールドで注目されている（池田 2016; Hagley & Harashima 2017)。VE とは Information and Communication Technology (ICT) ツールを活用して参加者が共に学ぶという緩やかな定義に示されるものであり、また COIL は VE の中でも特に複数の大学でそれぞれ開講されている科目間の連携に基づいて実施される活動を指す（国際教育研究コンソーシアム 2020)。COIL 活動の実践としては、例えば静岡県立大学と米国ノースカロライナ大学シャーロット校が 2019 年 10 月、11 月に実施した活動がある。この活動の内容は、米国大学生は日本語で、日本の大学生は英語を使って自己紹介およびお互いの大学を紹介するといったものであった（Yokono & Sawasaki 2020)。

前段に述べた通り、特に語学学習や国際交流の分野で注目されていた VE や COIL であるが、現在のようにコロナ禍のため直接的な人と人との交流が難しい状況にあっては、国際的な活動に限らずとも、学生の共同学習効果を最大限に生かすためのツールとしてその活用が望まれるものと考えられる。筆者が三重大学において担当する外国人留学生対象科目「日本事情 Ⅰ：三重の社会と文化」では、授業活動の一環として、2020 年 7 月 7 日～8 月 4 日の 4 週間を使い、本科目受講留学生と日本国内の他大学の学生（その多くは日本人学生）との交流を取り入れた国内 COIL 活動を実施した。ここでいう他大学の学生とは、静岡県立大学国際関係学部科目「日本語表現法 IA」の受講生であった。

本稿に報告するこの取り組みの概要は、筆者が担当する「日本事情 Ⅰ：三重の社会と文化」を受講した 10 名の外国人留学生（タイ人 3 名、ドイツ人 3 名、中国人 3 名、カンボジア人 1 名）が、静岡県立大学の学生 45 名（日本人学生 40 名、外国人留学生 5 名）を対象に、5 分程度のポスタープレゼンテーションの形で三重県に関する何らかのテーマ（名所、産物、三重県出身の人物など）について紹介した。本稿はこの COIL 活動の実践について報告するものであるが、加えて、本取り組みが発表者である留学生の日本語学習意欲を高めることができたかどうかについても、事後アンケートの結果

を基に報告する。

2. 活動の詳細

本稿に報告する COIL 活動の具体的な段取りとして、まず 1 週目（7 月 7 日～13 日）に、筆者担当科目で取り組みの概要について説明し、また多くの受講留学生にとって馴染みのないポスタープレゼンテーションという発表形態について説明し、この週を各自が発表するテーマを決める期間とした。発表テーマは、三重県に関わりのあるものなら何でも可としたが、複数の留学生が選んだテーマが重複した場合はどちらかの留学生が別テーマを選ぶよう調整した。その結果、10 人の留学生の発表テーマは、伊勢うどん、松尾芭蕉、石神神社、ナガシマスパーランド、真珠、伊勢えび祭り、鳥羽水族館、横山展望台、三重県の産業、夫婦岩に決定した。

発表テーマの決定に続き、第 2 週目（7 月 14 日～20 日）では、パワーポイントを用いた発表用ポスターの作成を課した。筆者が過去に実際の学会発表で用いたポスターをサンプルとして提示し、プレゼンテーション用ポスターの作り方を説明した。それを受けて留学生が自身の発表用ポスターを作成し、これらを筆者が確認し、日本語文の修正等を行った後、各留学生に返却した。

ポスター作成後、3 週目（7 月 21 日～26 日）に、留学生各自に自身のプレゼンテーション動画を収録させた。この発表動画収録に先立って、Zoom を使って自身を録画する方法を説明したワードファイルと説明動画を留学生に提示した。7 月 26 日までに全ての留学生から提出された計 10 個のプレゼンテーション動画ファイルは、7 月 27 日に筆者が作成したブログに掲載し、静岡県立大学の学生が視聴する準備を整えた。

翌 7 月 28 日から 8 月 4 日正午までの 4 週目に静岡県立大学の学生の視聴とコメントを募った。求めるコメントの内容は、プレゼンテーションおよび発表者の日本語運用能力に関する感想、評価、助言などであることを、事前の案内メールで知らせるとともに、ポスタープレゼンテーション動画を掲載したブログの冒頭に書いて説明した。この期間に、10 のプレゼンテーションに対して静岡県立大学の学生から 45 件のコメントが寄せられた。コメントの全ては発表の内容及び発表者の日本語能力に対する好意的な評価であったが、発表に対する改善点の提案を含むコメントも 17 件寄せられた。具体的な改善点としては、日本語の間違いの指摘、写真の量や字の量、字の大きさおよびデザインに関する提案などがあった。また、発表を聞いて三重県に行きたくなったという感想を含むコメントも 23 件寄せられた。

3. 事後アンケート

本取り組みを実施した 2020 年前期最終日（8 月 4 日）に、本科目「日本事情 Ⅰ：三重の社会と文化」を受講した留学生 10 名を対象に事後アンケートを実施した。この中の一つの設問として、「このプロジェクトを通して、日本語学習への意欲が増しましたか」という質問を設定したが、そこに書かれた留学生の回答をここで報告する。回答は「とても増した」、「少し増した」、「変わらない」、「少し減った」、「とても減った」の 5 段階で、さらにその回答を選んだ理由を自由記述形式で記すものとした。その結果、「とても増した」と回答した留学生が 2 名、「少し増した」が 5 名、「変わらない」が 2 名、そして回答しなかった留学生が 1 名であった。（この留学生はコロナ禍による母国からの要請で、7 月末に帰国した留学生であった。）回答しなかった留学生を除く 9 名による自由記述回答の内容は様々であったが、特に静岡県立大学の学生のフィードバックを意識していると思われるものは、「日本人の学生から、ポジティブな批評をもらったので、意欲が増しました」、「日本人が面白いと思うプレゼンテーションを作れるために、日本語がもっと得意になりたくなりました」（原文ママ）などが挙げられる（全て「少し増した」と回答した留学生の記述）。これらの回答からは、発表者にとって、見ず知らずの日本人学生に発表を見せフィードバックをもらうことが刺激となり、学習意欲の喚起を促した可能性を示唆している。

また、自分以外の留学生の発表を視聴したことによる影響を示していると思われる回答もあった。これに該当する回答は、例えば、「とても増した」と回答した留学生の「みんなの発音を聞いて、ペラペラようなかっこいいと思います。これを目指します(原文ママ)」という記述、また「少し増した」と回答した留学生の「あるプレゼンテーションの内容は難しかったので、もっと日本語の勉強を頑張らなければならないと感じた（原文ママ)」という記述などである。

一方、「変わらない」という回答選択肢を選んだ 2 名の留学生のうち一人は、「This class did not really challenge me in terms of my ability to speak and understand Japanese（原文ママ)」と記述した。本取り組みが簡単すぎたとするこの学生の意見からは、筆者によるポスターの日本語の修正がもっと精密であるべきであったという可能性、また発表の際の日本語でのスピーキングに対する指導が必要であったという可能性を示唆している。またもう一人は、「あまり自分で日本語の文章を書かなかったから、日本語の文法はあまり勉強できないと思います(原文ママ)」と記述したが、これに対しては、学生がポスター上に書く文量を筆者が指示・調整することが必要であると考えられ、今後の課題としたい。

4. おわりに

本稿では、三重大学の外国人留学生対象科目を通して、日本国内の他県の大学生に対してプレゼンテーションを行った COIL 活動の実践と事後アンケートの結果を報告した。その結果、他県の大学生（特に日本人）に発表を視聴してもらい、コメントを得ることによって、または自分以外の留学生のポスター発表を視聴することによっても日本語学習への意欲が喚起されたことが示唆された。ただ、アンケートの質問への回答として、最上位の選択肢（(日本語学習意欲が)「とても増した」）を選んだ留学生がわずか 2 名であったことから、期待された効果が十分に得られたとは言い切れない。さらに、本稿はわずか 9 名の留学生による回答からその効果を推察したものであることからも、ここで得られた結果の信頼性が高いとは言い難い。本取り組みが実際に外国人留学生の日本語学習意欲を喚起したかについては、今後も同様の COIL 活動と事後アンケート調査を行い、これと並行してより良い調査・分析手法を検討しながら、留学生にもたらされる効果を継続的に調査することが必要であると考える。

参考文献

池田佳子（2016）「「バーチャル型国際教育」は有効か－日本で COIL (Collaborative Online International Learning)を遂行した場合」『国際交流』vol.67, 1-11.

国際教育研究コンソーシアム（2020）「(第 3 回）国際教育のスピリットを取り込もう！Virtual Exchange (COIL) を超短期間ででも取り込む手法ワークショップ〈報告〉: 池田教授による日本語版解説」(http://recsie.or.jp/wp-ontent/uploads/2020/05/86029541c08855032 1db1ae29de894d4f.pdf)(情報取得日 2020 年 12 月 10 日）

Hagley, Eric Thomas & Harashima, Hideto. (2017). Raising the interncultural understanding and skills of EFL students through virtual exchange on moodle. *Proceedings of Moodlemoot Japan Annual Conference*, vol.5, 28-33.

Yokono, Yukiko & Sawasaki, Koichi. (2020). Cultural exchanges via flipgrid and ML (mailing list): How to effectively interact beyond textbooks and time zones. Paper presentation at Southeastern Association of Teachers of Japanese, February 2020, University of Memphis, TN.

☛（本記事は査読付きです。）

福寿草

JALT 2020 JSL SIG-related Presentations

JFL Teacher Education through Microteaching

稲葉みどり（Midori, Inaba）

愛知教育大学
（Aichi University of Education）

本研究では、学部生を対象とした日本語教育の模擬授業（マイクロティーチング）の教育的効果を考察した。模擬授業では、様々な外国語教授法の中からグループで 1 つを選び、その理念と特色を踏まえた授業を実践することを主眼とした。ここでは、学生による模擬授業の自己評価に着目し、学生がどのような資質・能力を養成することができたかを探った。

自己評価には、学部 2 年生という教育や実習経験が極めて少ないことを配慮した基本的な授業評価の枠組みを用いた。評価の観点として、「目標」「教材教具」「授業実践」「授業運営」「指導技術」「省察」に関する 25 項目を設定し、5 段階で評価してもらった。

分析の結果、学習目標の設定、教材教具の作成と活用、時間配分等の項目の評価が高かった。これは、教師主導で決定、実行できるものなので、学生には達成しやすかったのではないかと思われる。一方、質疑応答、誤用の指摘、誤用の訂正、指名等、学習者との相互交流を伴う項目の評価は低かった。その要因の一つとして、学習者役の学生が日本語学習者の理解しにくい点や誤用について熟知しておらず、授業中、意図的に間違える、分からない振りをする、質問する等、学習者役を十分に演出できなかったことが考えられる。したがって、模擬授業を行う際には、教師の立場から指導法を考えさせるだけでなく、学習者役となる学生にも課題を与え、当該の指導内容に関してどのような点が難しく、どのような誤用が見られるか等を具体的に考えさせ、その上で学習者役に臨ませることが必要であることが分かった。

いずれも、ホコリにまみれた旧稿からのしかも文脈を度外視した自家引用ではあるが、そこで指摘しようとした“日本語教育界を取り巻く社会的・学術的な情況・趨勢”は現在も事実上ほとんど変わっていないように思われる。むしろ日本語教育「界」が求められている様々な対応が、より具体的かつ個別的な錯雑性のもとで要請されるようになっているのではないか。その意味では、困難は累進しているとも言える。

模擬授業は、学生同士が教師役、学習者役になって行うので、本当の学習者不在という点が最大のデメリットと考えられる。しかし、学習者役をすることで、授業を学習者の立場から観察し、指導上留意すべき多くの点に気づくというメリットがあることが分かった。したがって、実際の学習者ではなくても、模擬授業を通した教師養成には意義があると考えられる。学習者役のトレーニングが今後の課題である。

アリッサムとマーガレット

JSL JALT Forum JALT 2020

JSL では、JALT2020 国際大会で 2020 年 11 月 22 日土曜日の朝の 10 時 45 分から 12 時 15 分まで "Reflecting on Their Own Experiences: JSL Teachers"というフォーラムをオンラインで開催しました。

進行役は JSL 企画責任者の柴川真由美氏で、登壇者は Maria del Vecchio 氏と松浦康世氏と Azalia Zaharuddin 氏の 3 名でした。

.....

The Effects of the Teaching Internship Observation Form: Findings from the Host Schools' Feedback

Presenters:
Maria del Vecchio
Assistant Professor, Nihon University
Michiyo Matsuura
Instructor, Waseda University

Classroom observation for a teaching internship requires critical evaluation of the student teacher's interaction and the classroom activities. The evaluation processes are pivotal in identifying their strengths and weaknesses as observed by their assessors. To reflect a needs assessment in the classroom context, the designs of observation instruments vary in their scope and depth.

This study validates the observation form designed to formulate an informed plan for the Teaching Internship Program in which we, as teacher trainers, could better prepare the student teachers for teaching practice in their host countries.

From the responses from the host schools, we were able to identify advantages and disadvantages of our observation forms in serving as a basis for evaluating their effectiveness. The results were useful in guiding our mission to plan and improve the evaluation process and criteria of the observation form.

1. The Teaching Intern Program (referred as TIP)

This program gives university students practical experience of teaching the Japanese language and culture in host schools ranging from elementary to high schools in English-speaking countries including the US, Australia, and New Zealand for 7 to 8 weeks.

Student teachers on TIP are required to undergo two months' pre-session and six months' pre-training before attending on-site teacher training in the host school. The pre-session consists of eight 90-minute classes in the first semester. At the end of the eight weeks, students are required to present a sample lesson in English. Those who pass the examination can attend the pre-training that consists of thirty 90-minute classes in the second semester.

2. The Observation Form

The observation form we developed in 2016 was informed by Teaching Benchmarks and Standards in the UK, Australia and New Zealand. It was aimed to see if the expected behaviors and practice of our student teachers fitted in with the host school's standards for skills, knowledge and values, as well as to help the TIP trainers gain insight on how to improve the techniques and strategies of teaching practice for the program.

The observation form, consisting of 50 Likert scale questions, has three main categories for our indicators: Interest and Motivation, Planning and Preparation, and Implementation. The Planning and Preparation category includes five subcategories: Purpose, Activities, Pupil

Materials, Resources and Teaching Method. The Implementation category includes three subcategories: Communication Skills, Questioning, Group work, and Pupils. The fourth category contains open ended questions to elicit additional information.

3. The Practical Implications

We looked at the mean scores of indicators showing where practice was strongest or weakest.

In the first year, the lowest mean scores were for how student teachers handled disruption and their level of confidence in the classroom. More insight came from the comments where we learned that there were problems with students having to wait around. Less structured lesson plans or activities with a lax approach were causes for the misbehavior. Reasons for laxness cited were that the student teacher did not enforce rules or did not use consistent rules. For confidence, we were informed that student teachers were influenced by the pupils in reaction to the class size and to their misbehavior.

In our training for improving these points, we followed Zieker and Liston's (1985) conceptual framework for practical reasoning and goals related to reflective teaching. We began by listing examples of what the student teachers perceived to be disruptive behavior. They described what they had experienced at school and recounted how their teachers had reacted. Then we tried to identify the causes for the misbehavior and how it affected the classroom environment. From there we considered pedagogical meanings with prudential actions. We discussed what to do against the problem behaviors, made evaluations on the situations, and suggested alternative solutions. From examples of misbehavior, we created cards for taking on roles of students misbehaving and the teachers reacting to practice on our training.

In the second year, there was a slight improvement in handling misbehavior. However, we noticed lower scores for pupils remaining on task and student teachers not being able to recognize non-verbal feedback. To address the issues, we watched videos and tried to find meaning in non-verbal messages. Some gestures were culturally different or too subtle to identify for the student teachers. More understanding of cultural differences in non-verbal feedback requires further research. More understanding of cultural differences in non-verbal feedback requires further research.

The challenge we had was to create an observation tool to define specific practices for the student teacher while the observers could target and evaluate the observed items. Our biggest concern was the limitations placed on the reliability of scores. We could not guarantee if observers had familiarized themselves with the forms before they started the observations. Standardization was also an issue. The age group of the class and observer's background, experience, or values can affect the results.

Adopting an observation form for improving professional development is one method to enhance teaching skills. We recommend further support for analysis and interpretation be served in combination with peer observation and reflective practice. Future research will focus on refining the observation form to achieve the common goals of supporting the needs of the student teachers, host schools and the program.

Reference

Zeichner, K. M., & Liston, D. P. (1985). Varieties of discourse in supervisory conferences. *Teaching and Teaching Education*. 1(2), 155-174. https://doi.org/10.1016/0742-051X(85)90013-7

.....

Own Language Use in The Online Japanese Classroom

Azalia Zaharuddin

Graduate School of International Studies, Utsunomiya University

Literature has shown that own language use can be helpful to a student's second language development. According to Sarıçoban, Tunaz, and Muyan (2019)

own language has been acknowledged "to make learning and teaching process more effective, to lower anxiety, to create a positive classroom atmosphere, to teach grammar structures and new vocabulary items" (p.429). Own language itself is used to refer to the language spoken by students other than the target language (L2) in the language classroom (Kerr, 2014). Although it has faced fierce backlash over the years due to its frequent association with the grammar translation method, studies on own language have moved forward and is in a developmental stage where proper framework and implementation manuals are required to avoid overuse.

Own Language Use Online

In order to avoid overuse of own language in the classroom, it is important to practice a principled approach. In other words, using methods and techniques that ensure own language is used appropriately and when most beneficial to students. Among the approaches include the functional translation technique (Weschler, 1997), the sandwich technique (Butzkamm, 2008), the mirroring technique (Butzkamm & Caldwell, 2009), and reverse translation (Kerr, 2014). These techniques and approaches can be utilized in a variety of classrooms, including classrooms where students do not share the same own language.

However, because of the pandemic, most classes are currently being conducted online. This sudden change in teaching style also requires modifications to how own language use can be utilized in the online classroom effectively. In his book *Translation and Own-Language Activities*, Kerr (2014) introduces a variety of activities that can be conducted in the classroom. Although these activities are originally intended for face-to-face classrooms, some have proven to also be effective in the online classroom.

(a) Making a glossary.

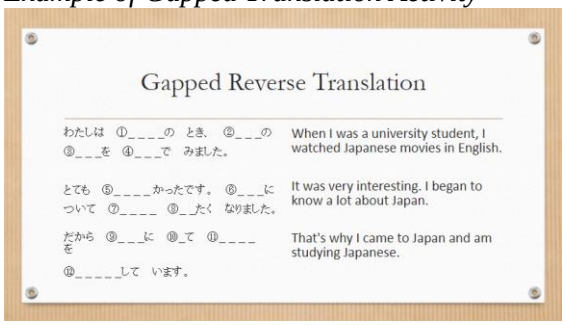
This activity is suitable for beginner lessons. Students are asked to translate common instructions used in the classroom to study basic classroom metalanguage, and to be used as a reference in the future (Kerr, 2014).

Procedures:
(1)Prepare a list of phrases or instructions that are commonly used in the classroom and fill them out in a google sheet. Make sure to leave space beneath each word for students to use during the class.
(2)During the class, share the link to the document with students and ask them to find the translations of the words that they do not understand and fill the blank spaces.
(3)Conduct feedback with the class and answer any questions they may have.

(a) Gapped translation activity.

This activity is suitable for intermediate learners. Students are required to use their own language to reconstruct a Japanese text with a gapped frame (Kerr, 2014).

Figure 1:
Example of Gapped Translation Activity



Procedures:

(1) Select a Japanese text of about 200 characters. Translate the text into the

students' own language and put them side by side. Next, take out selected words from the Japanese text and create a gapped paragraph.

(2) During the class, share the link to the document with students. If you have a large class, then they can also work in groups.

(3) Students take turns to fill up the gaps in the text until it is fully reconstructed.

These activities enable the teacher to check on students' comprehension, which can be especially challenging online due to the distance. The active learning aspect of using collaborative software such as google sheets can also encourage students to participate in the activity.

These are a few suggestions where own language can be utilized in the online classroom. Through the future development of this research, it is hoped that students and teachers will be able to use own language as a valuable tool in language learning both online and offline.

References:

Butzkamm, W. (2003). We only learn language once. The role of the mother tongue in FL classrooms: death of a dogma. *Language learning journal*, *28*(1), 29-39.

Butzkamm, W., & Caldwell, J. A. (2009). *The bilingual reform: A paradigm shift in foreign language teaching*. Narr Francke Attempto Verlag.

Kerr, P. (2014). *Translation and own-language activities*. Cambridge University Press.

Sarıçoban, Arif, Mehmet Tunaz, and Emrah Muyan (2019). Studies related to own language (L1) use in ELT from 2000 to 2018. *Research Trends in English Language Teacher Education and English Language Teaching*, pp.421-431.

Weschler, R. (1997). Uses of Japanese in the English Classroom: Introducing the Functional-Translation Method. *Kyoritsu Women's University Department of International Studies Journal*, *12*, 87-110.

☛編集後記

梅の花が満開となりました。梅と言えば菅原道真の和歌が有名ですね。

（庭先の梅の花）

「東風吹かばにおひおこせよ梅の花
主なしとて春な忘れそ」菅原道真
（Sugawara no Michizane）
"Kochi fukaba nioi okoseyo ume no hana
Aruji nashi tote haru o wasuruna"
興味のある方は以下のサイトをご覧になって下さい。
駆け出し百人一首(11)東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな(菅原道真)｜吉田裕子(国語講師)｜note

Please visit the above site for more information given both in English and Japanese concerning this *waka* created by Sugawara no Michizane in 901.

JSL SIG Membership Information

日本語教育研究部会

日本語教育研究部会（JSL SIG）は、第二言語・外国語としての日本語指導・日本語学習・日本語教育研究の向上を目指し、指導・学習・研究のための資料や情報を提供しています。更に、専門家の育成の為の外国語教育における日本語教授法や言語学（心理・社会言語学なども含む）の研究推進にも力をいれています。日本語の指導者・学習者・研究者の積極的なご参加を歓迎致します。

▶ **日本語教育研究部会メンバー募集**

本部会 JSL SIG は現在 45 名ほどの会員がおりますが、会員数を増やし更にネットワークを広げるべく、常時会員を募集しています。皆様の同僚やお知り合いなどにも、是非ともご周知下さい。

▶ **会員のメリット：**

1. 論文集『JALT 日本語教育論集』に投稿できる（2 年に 1 回発行、査読あり
2. 定期的にニュースレターがだされる
3. ニュースレターに論文や学会レポート、日本語の教え方・学び方、その他会員の学会発表・研究テーマ・教授経験など、紹介したい記事を投稿できる
4. JALT や PanSIG の JSL SIG フォーラムに、発表者として参加できる（フォーラムの企画に興味のある方は jsl@jalt.org まで）また NL の 2 頁にある連絡先までメイルを下さい。
5. 入会方法は、JALT ホームページをご覧ください。http://jalt.org/main/membership

……

Urban Edge Bldg 5F, 1-37-9 Taito,
Taito-ku, Tokyo, 110-0016, JAPAN
Tel: 03-3837-1630 Fax: 03-3837-1631
http://jalt.org/

JSL SIG Mission Statement

The mission of the Japanese as a Second Language Special Interest Group (JSL SIG) of the Japan Association for Language Teaching (JALT) is to serve as a resource for promoting JSL/JFL teaching, learning and research. We welcome JSL/ JFL teachers, learners, and researchers to join and take an active role in our SIG.

JSL SIG Membership

The JSL SIG currently has around 45members. To expand our network and share
JSL information more dynamically, invite your colleagues and friends to join!

Benefits of being a member：Be able to

1. Contribute a paper to the peer-reviewed *JALT Journal of Japanese Language Education*, which is published bi-annually.
2. Receive SIG newsletters a few times a year.
3. Contribute articles, conference reports, teaching ideas, students' essays, call for papers, etc. to the SIG newsletter.
4. . Participate the JSL forums as a presenter at the PanSIG and/or the JALT annual conference (contact jsl@jalt.org)
5. Please refer to the JALT membership categories and fees on the JALT homepage. http://jalt.org/main/membership

…….

庭先の南天